



リステラス星圏史略  
古資料ファイル

X-Ω-X

(転生管理委員会)

(発掘整理中)

霧樹里守 is 土岐真扉

( 転生 & 恋愛系 )

---

( 転生 & 恋愛系 )

## 神になった人。

---

大きな手が 彼らを包んでいることに 彼らは 気づかなかった。  
ただ 彼らは 彼が 自分たちの そば に いることを 感じた。  
暖かさを 感じた。  
手は 二人を 包み、 大地を 包み、 星を 包み、  
大きさや、 形や、 質量や、  
いっさいを こえた、 手、 となって  
宇宙を 包んだ。

— 彼は、 彼の深淵の はるか 彼方 から 響いてくる 声を きいた。  
声は こう 語っていた。  
おまえは 神に なった、 と。  
だが 神も、 さらに 大いなる  
神々の 人に 過ぎない。  
今、 おまえは 一つを 為し、  
さらに 大きな 一つの 途（みち）の  
最初の 一步を 踏んだのだ。

彼は 開かれた 門に 立ち、  
新たな 光と 世界を 見た。

## 「馬になった 真理」 (小6)

---

(アトランティスが海底深くしずむとき、) (小6)

2016年7月15日 リステラス星圏史略 (創作)

### 馬になった 真理

あらすじ。

目の見えない真理には友だちがいなかった。

そんな時、父親、こへいが、野生馬の首りょう、里（サト）をつれてくる。

里は真理にだけ心をひらくようになるが、一月後、

副首りょうのメス馬 菊とともににげてしまう。

真理は、里からはなれず、最後におちて死んでしまう。

その後、その里のむれを追って走るめくら馬を見た人がいた。

(加代子夫人が亡くなった。) (たぶん保土ヶ谷時代?)

---

(加代子夫人が亡くなった。) (たぶん保土ヶ谷時代?)

2016年8月18日 リステラス星圏史略 (創作)

ゆうべ、加代子夫人が亡くなった。

石川翁は、ただ静かに微笑っていらっしゃるばかりで、記者の質問にも、かけつけた読者たちの弔問にも、ただ小さく小さくうなづいていらっしゃるばかりで、決して口を開こうとはなさらなかった。

眼には明るい灯火がともっていた。

その様子は、口蓋をあければ、まるで、妖精のように美しい蝶が飛び立って去ってしまうというような仕草で、妙に子供っぽく、そしてまた妙に満ちたりて、完成された全きものを得た人のような、座姿でもあった。

...仏さまのようだ。

ふと、挨拶をしての帰り道、弔客のひとりがつぶやいて行った言葉は、夫人にむけられたものではないと思う。

加代子は、むしろ童女に還ったように清々しい、優しい笑顔をその白髪のなかに浮かべていた。

...先生。

葬式もすみ、初七日もすみ、幾日かたったある日、若さのまだ残る編集者はきっちりと膝を折って、その片づけられた書齋にいた。

...中断したままの、連載の件ですが...



( 旅出ちの種類 | ) 「 天 船 」 1. (高校 or 素浪人中 ?)

---

( 旅出ちの種類 | ) 「 天 船 」 1. (高校 or 素浪人中 ?)

2016年8月27日 リステラス星圏史略 (創作)

旅出ちの種類 | ・ " 天 船 "

だるいの。

あ、また来たな。体が動かない。

あたしは椅子からずり落ちる。床に寝そべってしまう。

金縛り... と言うのだろうか、こういう状態を。

違うと思う。金縛りっていうのは身体の自由が利かなくなること。あたしのは、心が。

精神（こころ）が自由に使えなくなるのだ。奈辺かへ連れて行かれてしまう。

だるくなるのは、単に副次的なもの。

...なんにせよ。

決心していた。

今日こそは。これの正体を見極めてやる。

いつもいつも不意にやって来ては頭痛と冷感を残して去っていく、不確実な現実と夢との狭間にあるものの、正体。

ひきつけられる、誰かに呼ばれている。

動かない心のなかでそれでも眼を閉じなかった。やがて...

(あーにゃふらーあまふな)

あたしの内側に呼ぶ声が聞こえてくる。誰？

(あーにゃふらーあまふな)

(あーにゃふらーあまふな)

( 来てよ 来て 来て 来て... )

(あーにゃふらーあまふな)

アーニャフラーアマフナ。

それは、あたしのことだ。唐突に、わけもなくそう思う。

いつか何処かで聴いた声はあたしを呼び続けていた。

意識が白濁する。どこか"異(ちが)う"処にあたしの魂は居る。

(手伝って。アーニャ・フラー・アマフナ)

ぼやけた白の空間で誰かが手まねきしていた。

1度も見知らない顔、同時になによりもよく知りぬいた相手。

(なにをすればいいの)

あたしが、ううん、あたしではない《あたし》が表に出て受け応えしていた。

自分が半透明なガラス戸にでもなった気分。

あたしは確かにここに居るのに、もう1人の《あたし》が背後にいて、ガラス戸の



あたし越しに意識している...

(あれよ)

夢のなかの女.....女性だった.....は、イメージの内では何かを指さしていた。

(あのマを倒してほしいの。力を借して。)

(わかったわ)

《あたし》は軽く肯いて力強く前に踏み出す。

空間の暗闇に念をこらす。

事はすぐに片づいた。

(ありがとう。今日は簡単に終わったわね)

(そうね。じゃ、帰るわ。)

《あたし》はあたしの内部に埋もれて行こうとした。《彼女》もまたあたしの視える範囲から徐々に遠ざかって行き...

(待って!)

叫んでいた。それはあたし。

誰なの... あたしの問いに、

《彼女》は優雅な猫のように微笑んで振り返っていた。それだけは覚えている。

「麻子。ちょっと、起きなさいったら。風邪ひくわよ」

「ん……」

強引な声にひき反させられた現実。

おかあさん。あたしはいつも眠たくて寝てるわけじゃないのよ。

いつものように冷汗でぐっしょり。頭はクラクラするし、体中から精気が抜けている。

まるで長距離を全力で走らされた後のような脱力感。なのにあの心地良い疲労感には程遠い。

知らないものに自分が振りまわされているという、恐怖に近い不安感。

いつもと全てが同じ症状だった。ただ、違うのは…

覚えている。1つだけ。振り向いた《彼女》の、猫のような笑み。

なん、だったんだろう、あれは。

何か不思議なものを見た気がする。何か不思議なことを、尋いて、教えられたような気が。

そして《彼女》。

そう… 何処かで見知っているような、それでいて1度会ったなら2度と忘れていられる筈のない。

「ちょっとどうしたの麻子」

母さんが心配そうにのぞきこむ。

それでもあたしの"貧血"が、普通のものではないとは、思っていないみたいね。

「なんでもない。ちょっと出かけてくるわね」

猫の微笑... それだけが手掛かりだった。

あたしは悪寒の残る体をひきづりあげて部屋の戸を開ける。

あの美女は何かを言ったのだ。それが頭の中に鍵になって残っている。

"扉"を探し出せば... それは開く筈、だった。

2016年8月27日 リステラス星圏史略 (創作)

盲滅法に家を出てしまってから後悔する。

真っ昼間の東京の街を歩いてみてもあまりにも無駄なのだ。明るすぎる。

明る過ぎて、あの昏い空白の空間での、時間が奈辺かに千切れて溶けてしまう。

道行く人々は皆んな平らな現実足をつけて歩いていた。

あたしだけが... あたしだけが、何故、あんな風に時間と意識とを切りとられなければならないんだろう。

いっその事そこらの辻占いにでも頼ってみようかしらん。

目をつぶると、扉が見えた。

あの "扉" だ。あたしの鍵に合う。

目をひらくと非現実の世界だった。いや... 違うな。

ここは確かにあたしの住んでいる町、通り慣れた通り。

ただ、町並みが透けるようなのだ。建物も、歩く人々も。

灰色の陰気な町が急に不確かなものになってしまったようで、透明で、手に取るように判る。

淡泊な色彩、視界をさえぎるものは何もない。

その中で扉だけが明確なフォルムを持ち、あたしを呼んでいた。

単純なデザイン、ありふれたスチールのドアとノブ、横長の白い表札。

気がつくと扉の前に立っていた。あたしは、ためらわずにそれを押し開けた。

「来たわね。」

窓辺から彼女は振り返る。つややかに黒いクレオパトラカット、色白の肌。3角の淡い灰色のサングラス。

すらりとした体を黒と白とに包んで、紛れもない、《彼女》は... 夢の中に出手きたあの美女だった。

「来たわよ。」

あたしは何故だか不機嫌になっていた。先程の、なにもかもが透明に見えるという変な現象は扉を開けた時から消えてしまっていたけれど、却って...

視界を "目に見えるもの" だけに限られた事が、まるで世界から閉めだしを喰らったような衝撃（ショック）で、「違和感」。

「聞きたいと思ってたのよ。」

信じられない大胆さ。すすめられもしないのにあたし、初対面（の筈だ）の年上の女の人の部屋の中央へと、ずいと上りこんでいた。

「なんでこのあたしをあんな目に遇わすの、あなたが」

...あ、駄目だ。意識がスライドする。

時折り現れる、自信に満ちたあたし。あたしの内部のもう1人格。

「相変わらずね」

《彼女》はゆったり微笑んだ。あの、優雅な猫の微笑。

「会いたかったわ、アーニヤ。ずいぶんと待たされたことよ」

猫の舌ざわりのようにぬらぬらと甘くザラついた声だ。

夢のなかの、いつもあたしを呼ぶ声。それ以前にも、多分、ずっと昔にも……

聞いたことのある声。

「はん。」

と片目をつぶってあたしは言う。

「それにしちゃあたしの "貧血" もまたずいぶんと昔からのものじゃない。あんた何様だと思ってんのよ。そのおかげであたしやいつも、文化祭や見たいテレビやら、逃してたんですからね」

「それはあたし1人の力では戦いに足りないからだわ。"死者" のエネルギーは閉じ込められている分、とてつもなく強いのですもの。」

「死者？　はん?!」

「それにもともとあなたは王者の1人だった。その"力" を不利な時のあたしが利用して、どうしていけないの」

「……ちょっとオ！」

とてつもなく、強気。何を言いたいんだこの女あ。

訳の判らない事しゃべってこちらを混乱させよおったって、

「あたし達は18年前まであなたと一緒にいたわ」

更に更にらちの開かない言葉を女はしゃべりだした。

...日本語を話して欲しい。

...切実に、そう思った。

「思い出して欲しいわ。18年前まではあたし達いつも一緒だったじゃないの。

忘れたなんて単純に云わないで、記憶巣を解放して。

17年前にあなたは小泉家の長女としてこの世に戻った。現在の名前は？

そう、小泉麻子。そして？

アーニヤ。考えをそらさないで。

あなたは思い出さなければならないのよ。

18年前にあなた達は皆んな肉体を失ってしまった。幽体として残るのはエネルギー的にあまりにも不利だったし、銘々で転生の術をかけたとはいえ何人がこの近くに生まれてきてくれるものか、不安だったわよ。はっきり云って。」

(「硬派長寿人」系)

---

(「硬派長寿人」系)



「いつかある日に」 (中学3年?)

---

[「いつかある日に」 \(中学3年?\)](#)

2016年8月25日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

「いつかある日に」

「いつか自由になるんだ。」

彼女はいつもそう言って夢を語る。

「そうしたらわたしは、何物にも捕われず縛られず、ただ水のように風のように、あるがまま、流れてゆくのだよ」と。

それが、彼女が大人になった時の事なのか、それとも彼女の言う『何回も何回も』生き死んで、生まれ変わった後の事なのか...?

「そうね。」

と彼女は答える。

「それがいつの事かは、わたしにもわからない。"いつか" ...。魔法の言葉よ。—だけれど "いつか" は必ずやって来るんだわ。」

彼女は信じてる。だからこれは真実なのだ。

「自由になったら、それは完全な自由よ。」

彼女は口癖のように謳(うた)う。

「わたしはなににも捕われない。だれもわたしを縛る事はできない。わたしは自分以外のものを何も持ちはしないし、だれかがわたしを持つ事もないわ。...ただ、『あの人』を除いてはね。そうしてわたしは一人で、あの人を探して世界中へ旅するのよ。時も権力もお金も、世間も、なにものもわたしを止められやしないわ。なぜってわ

たいはその時、自由なのだから。」

「一人で淋しくはないかって？ バカね。」

光の中で彼女は純粹に笑う。

「自由の代償は孤独。でも切ないのは今でも同じよ。わたしは哀しくはならないの。どんなに寒い時でも。」

「だってわたしの中には灯がともっているんですもの。わたしはあの人...わたしのただ一人の他者を探しにゆくのよ。それは、今すぐに会いたくて、切なくて、涙をこぼしてしまう日もあるけれど、時が来ればいつかはきっと巡り合えるわ。だってその人はいるから。」

「素適なのよ。自由だって事は。」

街に行く時に彼女はささやく。

「ハンドバグーつとスーツケースよ。自分以外にはそれだけを持って、わたしは街から街へ歩いて行くの。闇色の夜汽車から、見知らぬ町へ降りたちましょう。霧の深い道を、どこまでもただ歩きましょう。誇り高きジプシーたちと、一やを共に歌い過ぎて、初夏の夕辺には、さくらんぼを籠いっぱい、買って宿まで食べましょう。」

( 淫魔 & 吸血美女 or 「人外」 系 )

---

( 淫魔 & 吸血美女 or 「人外」 系 )

猫の名は ね子。 (7月8日のできごと)。

---

猫 の 名 は 、 ね 子。

(7月8日のできごと)

じっ子。

つまり 地造 (じぞうではない、 じづくり と 読むのだ。) 家の

亜呼子 (あここ) は、

日曜日の朝、

まだ半分 眠っているうちに 毛布を ひっぺがされた。

なによお、 と 寝ぼけた 声で 抗議しても もう遅い。

亜呼子 の 母さんは 忙しいのだ。

たたきおこされて、

ねこよねこ！ ねこ見にいらっしやい！ と、

気げんの いい 母さんに 無理矢理 ひっぱり出された。

..... ヨタ ..... つっつ

猫は 玄関の外で 近所の ガキ猿 二匹に つかまっていた。

真っ白？ の はずなんだけど、 うす汚れて 灰色だった。

頭のとっぺん、 つまり 耳の間だけ 本物の 灰色。

後足が へんな風で ふつうに 歩けない。

くる病よ。

亜呼子の 母さんが 言った。

ねこは 父さんを 抜いた 全員の 賛成により 地造家の 一員となった。

( 父さんには 相談するだけ むだだ、 というわけで..... )

帰ってきた 父さんは

小屋まで 運んで来た 後だったので

反対の しょうが なかった。

ねこは 実に 悠然と 食事を 食べていた。

夜、 亜呼子と

弟の 狂多 (くるった) は

ねこを お風呂に 入れた。

ねこは、 ねこらしく 暴れないで

大人しく お湯につかっていた。

へんな ねこね、

と 亜呼子は 思った。

( ねこは ぬれると すごく やせて みえるのだ。 )

そして ねこの 名は ね子 に なった。

ね子は ナーゴ と 低い声で 鳴いた。

.....夜半過ぎ。

宿題を 終えた 亜呼子が  
お風呂に 入ろうと ドアを あけると

湯ぶねに 大きな 大きな ねこが  
どっぷりと つかっていた。

そのねこは ね子では なかったけれど、  
ね子を そっくり  
大きく したような やつだった。

大きな ねこは ニッと 笑って  
かぶっていない 帽子をぬぐと

ふしぎの 始まりは、 いつも

ふしぎで ない ことから。

と 言って、  
しまっている窓から 飛びだした。

亜呼子は その晩、  
大きな ねこの 入っていた お湯で 髪を 洗った。

くつのおばあさん（仮題）

こんな話をしても誰も信じないだろうな。

あたしには...まあ類は友を呼ぶとはよく言ったもので...昔から妙な知りあいとばかりつきあいがあるのだけれど、それがなにも人間だとばかりは限らない。妖精小人の一族といえいいのか太古の種族の生き残りなのか、ひとりとても年をとった小さなお婆さんの知りあいがいて、どれぐらい小さいかというとよくあたしの防寒ブーツのなかにすっぽり座りこんでは昼寝をしている。あったかくて居心地がいいのだそうだ。

もう何代も前の住人の頃から、今はあたしのものになったこの部屋（アパート）の、靴箱の奥に住みついているらしい。これまでの人は、みいんな彼女と『そりが合わなかった』とかで、正体不明の座敷童子現象を勝手に気味悪がってすぐに出て行くか、暗に彼女の魔法でいびり出されたか、どちらか。...どうりでこんないところの部屋代が安くなったわけだ。大家さん、お気の毒に。

幸いにもあたしは無事彼女と共存体制を確立し、のうのうと棲みついている。

ん、あたし？ そう、作家志望なんだよね、これでも。

「う～～。そういやこんどの新人賞のネタ、どうしよう。」

ある晩のことだった。例によってコタツにもぐりこんで原稿用紙どうしてもうまくいかない第4章と格闘していると、熱中のあまり辞書をひきよせるはずみに紅茶ポットをぶちまけてしまった。

きゃー！

もちろん、生命より大事な原稿用紙だけはすぐに抱えあげたから無事ですよ。だけ

どコタツカバーとじゅうたん、べしゃべしゃ。あや～～。

と、おかしいじゃないか、いつもならシャクにさわる高い声でキィキィ、まったく、アキコ、誰が掃除をすると思ってるのいるんですか、と実家（うち）の母親（おかん）よりも口やかましい彼女が、静かにしずか～に生気のないため息をついて後かたづけに立ちあがった。

あれえ？

「ねエ、ロンドン、どうしたの。いつもの御説教はなし？」

「わたくしあたしの名前は\*\*\*\*\*ですよ。いつも言っているでしょ。えげれすの首都みたいななまりで呼ばないで下さいね。」

おっ。可愛気のないところだけは健在だな。

んなことを言ったってあたしにはそれ、ロンドンか、ドンドンて風にしか、聞こえんわい。

「だからそりゃ日本人間には発音は無理なんだってば。」

「そんなことがあるものですか。あたしには、ちゃんと日本人間語がしゃべれているんですからね。まったく人間ときたら自分たちのことにしか興味をむけないで……  
ああ、ああ。おくれはもう完全に染みになりますよ。とにかく早く洗わないと… ほらほら、さっさと上のものをどけてどけて。」

「あ、うん。」

自慢じゃないけど、家事は不得手だし、運動神経はトロいのだ。あたしがもたくさとコタツ板をはずしにかかっていると彼女はさっさとカバーひっぺがしてまるで洗濯機に直行してしまった。

あの小さい身長30cmに満たない体でどうしてそういう芸当ができるかといえば、もちろん半分は魔力を借りてるからだ。

洗濯機にたてかけたはしごをよじのぼりながら、だけど彼女は小さなため息をついた。

「まったく、人間（アキコ）ときたら、これじゃあたしがいなくなってしまうたら、どうなるのかしらねえ。」

「え。ちょっとロンドン。」

「あたしの名前は\*\*\*\*\*ですよ。」

「んなことはいいからさ。いなくなっちゃうって、それ、どういうことよ。どっかに引っ越そうっての？ 人間（あたし）に、見つかったから？」

...やばい。明日っから何食べて行きていこう。まともな料理がつかれない。

「その程度ですめばいいんですけれどねえ。」

彼女は、とっても暗あく、呟いた。



「つれて帰って。」 (高校?)

---

「つれて帰って。」 (高校?)

2016年8月25日 リステラス星圏史略 (創作)

つれて帰って。

imaging from Bonny Tiler " Take me back "

俺が彼女に頼まれたのは三日前、旅の終わりの嵐の晩だった。彼女を愛していたので、乞われるままにその行く先の判らぬ放浪に長いこと俺は同行（つきあって）いたのだ。

風雨を裂く稲光に折しも浮かび上がる不気味な黒い城市を指して彼女は言ったものだった。

「 1. とんでもない話 」 1 (高校??)

---

[「 1. とんでもない話 」 1 \(高校??\)](#)

2016年8月26日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

喰魂記...しょくこんき...

1. とんでもない話

「高木（たかぎ）さ～ん。御面会よォ、お兄さまァ。」

「え？」

ひとり窓辺に腰掛けて静かに本など読むふりをしていたあたしは、顔をあげた。兄？

廊下に出て行ってみれば見知らない男子が1人居た。

あ... はん。"エキゾチックな"美型。ややシブめ。3年のクラスバッジ、ネームプレートには"TAKAKI"。

間違われるのも無理はない。これは絶対... "お兄様"のセン。

「ちょっと話があるんだけど、いいかな」

彼の方にも誤解をたく意志ってないみたい。

あたしも、別に不都合ってないし。

「ええ、いいわよ」

読みさしの文庫本から指ひきぬいて、無造作にポケットへ。

この高校の制服ってこういうことのできる大型ポケットだから、好き。k

それからちょっと茶目つけて付け加えた。

「行きましょ、お兄さん。」

彼...謎の美男子TAKAKIクンも、ふっと妖しげな微笑を浮かべた。

「きみの本名を知りたいんだけど」

本当は立入禁止の、屋上の風に黒髪なぶらせて、彼。...なんだ、口説く気なのオ、それならそれで下校時間にでも待ち伏せてくれて、お酒の一杯もおごられてみたい。

でも美型だから、許そう。風と白い雲が気持ちの良いことだし。

「メリアよ。高木メリア。国産風と言うなら明るき夜って書いてめいや。」

それとなく端まで歩いて行って屋上のフェンスに肘をつく。ほら、こうするときれいでしょう。彼からは斜め後ろ姿になって、長い黒髪に飾られた白い頬と高い鼻すじが、どんな効果を為すか。知ってるんだ、あたし。

ちらっと流し目で微笑んでみたりしちゃいながら、考える。悪くないなァ。うん、悪くない。新規編入したクラスに美男・美女が居なくてフテていた身にとっては、美型と2人で屋上で、てのは決して気に喰わないシチュエーションじゃない。

(たまにはいいな、青い空の下、ケンゼンな恋愛ごっこも)

場面設定もいいことだし、奥手な男だったらこっちからキスくらいの誘い水をかけてやってもいいなァ... なんて、いけない考えをあたし、おこしかけてた。とにかく5月の屋上って気持ちいいのよねエ。

表面は無邪気っぽく婉然としているあたしに、だけどその男の2言目っていったらまるきり予想外だ。

「うん、戸籍に登録してる名前なら知ってるんだ。調べたから。」

...え？ え〜〜〜？

...ぎくう。

「ぼくの知りたいのはきみの本名、て言ったろ」

「ちょっ、ちょっと待ってよ。戸籍名以外に本名なんて、あるわけが...」

「あるんだろ？」

...う。駄ァ目だわ、これは。完全に負けてる。

なんて...謎めいて軽快な微笑み。

「.....ファダ。.....」

知らない間にあたし答えていた。だって青空に白い雲で、それよりも真っ白い素適な歯並びで、ちょっと浅黒い異国風の肌色に、なんて、深い、瞳... ハスキーな、胸にズシンとする声。

(いかん、美型に弱いクセは、改めねば)

とは、思いつつ、あたし更に数秒間、彼を見つめていた。

あたしよりもさえ、はるかに高い身長。すらりとして、厚味も十分にある胸から足にかけて。あたしよりもさえ、はるかに高い身長。

これは大事な条件だった。

だってね、あたしこの4月にこの公立高校に入学したじゃない、編・転入ではなく。なんでわざわざ私立でない、ムズかしい試験のある公立高校かっていうと単に制服の好みの問題だけど。

で、編入したわけじゃないんだからクラスは最初から1年に決まってる...高校1年。

高一よ、高一。もう、もう、こおいち、なんてったら、中学4年生だと思ってた方が早いんだから。女の子はともかく、男の口のまゝガキっぽいこと、成長途上なこと。

あたし、女子にして身長170近くある。んでもって、あたしより高いのってクラスに数えるしか居ないんだものオ。殆どトントン、悪けりゃ頭一つ、下だ。

おかげでここしばらくついて回ってるのは"エキゾチックな"美人、の形容。あたし才媛を誰も口説きに来てくれない。

(あ〜ん、悪ノッて3年分も学費(おかね)貯めるんじゃなかった...)

解るでしょー、こういう境遇にいる美女にとっちゃ、いま目の前にいる不思議なこの男(ひと)、貴重品よ....。

(にしても戸籍名と"本名"の語意を使い分ける、このおに一さん何者だろう?)

なんて考えは、さておいて、あたし度胸を決めた。

「ファダ・メアルン。あたしの"本名"はファダ・メアルン・II(サーラ)、よ」

「結構。やっぱり"本名"のある人間だったね、きみは。ぼくはタカキ・カオス...これが本当の名さ、ファダ。じゃ、また」

じゃ、また？

.....ちょっとオ！

それは無いでしょう。云うヒマもなく、彼の姿は階段に消えていた。

あ〜んっ!!

五限目。授業。

別にね。学年にクラス、名前まで判っちゃってるんだから、こっちからコナかけに行けばいいのよ、そうよ。ただ、単に自分の外見に自信持ってるあたしとしては、あそこまで男にうっとりさせられておいて、じゃ、また、なんてのにプライドをひっかかされているだけで。

(.....あ、やば。)

耳にピクンときた、胸があったかくなかった、これは恋の予兆、あたしの場合。

ううん。別にやばくないの。だってこの感じが欲しくて美型、探してたんだもの。あたし、人に恋をするのって好き。恋をしている時の自分が大好き。

...ただね。

今度ばかりは、相手が問題だった。

『ファーダ。じゃ、また』って彼は言ったのだ、あたし（ファダ）の事、ファーダって。

何で、昔使ってたあたしの言葉の、あたしの名前の正確な愛称まで、知ってるっていうのよ？

...誰だろう...

今度の恋にはかなりのめりこむ事になりそうだな、自覚が深まるにつれ、この疑問視と不安は胸の中でどんどん広がっていった。

あ〜んっ。落ちつかないじゃない。第一、偽造のものとはいえ、こっちはどうやっ

てか戸籍まで見られちゃってる相手のこと何も知らない、なんて恋をする上で断然不利じゃないのっ！

(決めた。放課後、クラスまで行ってみよう)

即断即決即実行。恋する上での、あたしのルール。と、

「高木さん」

インケンイヤミな中年オバンの声が飛んできた。

「はい。」

静かにお返事、上背のある身体を武器にいとも優雅に立ちあがってみせる。太身短駮のオバサン、ますますインケ〜ン！な、嘲顔（えがお）。

う〜。イヤな顔オ。さっきっからあたしが考えごとしてたの、気がついてたみたいだもんなあ。案の定の質問せめ。さっきの話のなんたらがどーの、先程挙げた例の3つめがなににしたの、巧妙に固有名詞が迂廻されてる辺り、陰惨な趣味ねエ。

全部正答してやったら凄い顔、してた。アハッ。

なめるんじゃにわよオ、あたしが合計で何百年、『学生』てのやってると思ってるの。

自分が絶対そうなる心配が無いだけに、中年の、若者に対する嫉妬がらみの微妙な心理っていうの、あたしの眼には激しく滑稽に映る。

.....あたしは絶対にそうなる心配はない。

.....年を取る、老いる、衰えるっていうのは.....

どういふ感じなんだろうね。

成長する、ならまだ少しおぼろげに覚えているけど。

もう何百年分『学生』てのをやって来た事だろう。ここ数十年間は外見年齢16〜

18歳（ちょっと表情を変えてやるとどうとでも見える）を利用して、半年くらい深夜の"セーラー喫茶"やらその類で稼いでは1~2年、事情があって親元離れて暮らしてる高校生、ごっこをするってパターンが肌になじんできちゃった。

そう..... あたし年齢（とし）っていう奴をとらないの、全然。

怪我すりゃ血が出るし食べなきゃ死ぬだろうと思うから、別に吸血鬼でもグールでも何でもありゃしないんだけど。超能力者、ってんでも、あいにくいし。...欲しいんだけどね。

ただ、年だけを取らない、普通の人間。生活費稼いで、町から町へ。学生になったり、バイトしてたり、結婚...みたいな事もしてみたことはある。

ただ、年だけを取らない。

だから1人旅。北から南へ西から東へ、1つの国が手狭になったらさっさと高飛びして、また次。自分の生まれ育った土地も... もう忘れた。

そうして数千年をあたし、生きてきた筈。

あたしだけじゃないのよね。

数千年なんてケタはずれのオーダー、旅してると世界のあちこちで同一人物に再会したりする。

中には超能力者や魔法使いもいるのよ。

純粹地球人のあたしっから云えば宇宙人とか異次元人とかも、いる。

未だ数十年のキャリアしかない奴から、多分銀河系より年喰ってんじゃないかって人まで... 様々。

ただ共通点は皆んな種の限界を無視して長生きし続けてるってこと。

多くは不老で、たまに不死。それでもって皆、"旅"を続ける者で... 大抵の場合、自分の力で寿命を保っているわけではない。



そんなあたしたちの存在を知る人は、ひっくるめて"不思議の旅人"（ふしぎのたびと）と呼んでいる。

...訳の判らない集団だから。

いや、集団、なんて云っていいのかなァ。

誰もが自分の旅を歩んでる。複数の不思議の旅人が集まるのなんて、まれな事なんだけど。

## 2. ....娘！？

「...あの、ここ、3-Bですよ。高木、さん、居ますか？」

六時限目終了葬送に、H.R.も抜け出して来てみれば、なんと3年は選択授業。暇そうに居残っている人達に声をかけると、高木ならこの時間は部室だろ、て教えてくれた。

「美人だね、彼女ォ。高木のなにー？」

「"妹" ですよ。ヨロシクね」

あたしの神経も太いもんだ。

(もしかしたら...)

思い当たっていた。

(彼も何かを"探す人"なのかも知れない)

不思議の仲間であることは確かでしょう。

旅人ではないにしても。

科学部室。

「あの、失礼します。」

顔をのぞかせると彼は居なくて、他に4～5人

(未完)

(こんなことになろうとは、思ってもみなかった。) (高校?~派遣頃?)

---

(こんなことになろうとは、思ってもみなかった。) (高校?~派遣頃?)

2016年8月31日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント](#) (2)

.....こんなことになろうとは、思ってもみなかった。

彼女に関する奇妙な噂は聞いていた。吸血鬼、魔女...あるいは、せいぜいマシなところで吸血癖のある気狂いだと、言うのだ。

かつてのB.F.は皆、彼女と一緒にいる時に事故死や変死を遂げ、死体の見つかったためしはないと。(これは僕も捜査に尋きに行って確かめた。)

だけどそれがどうだと言うのだ?

行きずりの旅行者だった僕は、そんな噂を教えられるずっと以前にすっかり彼女、ルルドーの美しさに魅せられてしまっていたのだし。

そこで僕は愚かにも、田舎街の偏狭な人々が彼女の奔放な美しさをねたんで、古い言い伝えをでも持ち出したのだろう。可哀想な、孤独な彼女!...と、ひそやかな騎士道的道場に酔いしれてさえたのだ。

その奔放さを、と言えば彼女はまったく、かつて見たことのないほど気まぐれな女だった。雨がみたいと急に言い出すので夏の日照りの中、天気予報を追いかけて丸一昼夜も車で走らせたことがある。

すると、あと小一時間もすればようやく小雨降る圏内に入ろうという時になって、言ったものだ。

アタシ雨ハ嫌イヨ、オ気ニ入リノ青イ傘、持ッテ来テナインデスモノ!

.....しかしそういった時の彼女の、なんと愛らしく、無邪気な気品さえたたえた物腰だったことだろう。

彼女ほどに気まぐれの似合う存在もあるまい。唯一いるとすれば... それは高貴な血統をひく猫の女王だけだ。

その上に、彼女には、鮮やかによく動く紅い唇と、白く華奢な肢体があった。

私は徐々に彼女を愛した。

彼女の高貴な魂を。

いや、出会った最初の瞬間には彼女を恋していたのかもしれない。

旅先の恋にすぎない筈の感情はまたたくまに激しく燃え上がり...

滞在をのぼしのぼしして直ぐに費やしてしまった短い夏の終り、わたしの心は既に固く決められていた。

言うのだ... 彼女の前で。

「え、なんですって、」

わたしのつたない申し込み（プロポーズ）の言葉を聞いた時、彼女は、それが癖の肩をすくめるようなやりかたで、小首をかしげた。

「本気なの？」

「もちろん。」

熱をこめて本気であることを誓う以外、わたしに何ができただろう？

「休暇はもうじき終わってしまうけれど、幸い...と言うべきか君には身寄りもない。どうか私といっしょに来てはくれないだろうか？ わたしは君と一緒にいたいのだ。永遠に。ずっと。片時も離れることなく。」

「出来ることなら君とひとつの体になってしまいたいくらいだよ。」

わたしが熱にうかされやすい性質（夕子）の青年だったことは否定するわけには行かない。だ

けど少なくはない経験の上でわたしは知ってもいたのだ。

そう。女性は必要以上に大げさな言いまわしを、好むものだということ。

事実、彼女は最後のセリフを聞くと... ニッと謎めいた微笑を浮かべてわたしの肩に美しい双腕をかけたのだ。

「うれしいわ。本当に、そう思っていて下さって？」

あたりはひと気のない夕暮れの森だった。

わたしは見た。彼女の瞳が魔性にきらめくのを。

...見たと、思った。

「助かったわ。この体はもう大分古くなっていたのですもの。今度はあなたのを使わせてもらえるのね。」

美しい、紅い唇がわたしの息をふさぐ。

「...やれやれ」

高い声でわたしは呟くと、足元にころがるそれを見つめた。

わたしの正体を秘密にしておくためにも、始末しておかねばならない。

車に乗せ、村一番の高い崖にむかって全速を出すように仕掛けをする。

空に飛び出していく最後に、かつては美しかった、異形の魂に支配を受けていたが故に不自然な速さで腐敗をとげようとしている"彼女"の横顔が見える。



(メモ) 『手紙』 (怖い掌編集) (2016.07.22.)

---

(メモ) 『手紙』 (怖い掌編集)

2016年7月22日 リステラス星圏史略 (創作)

1. 不倫相手からの恋文が夫にバレてしまった貴婦人の話。
2. 都からの官吏採用通知が来て大宴会になった秀才の話。
3. 毎月必ず手紙を書く約束して出征した兵士の話。

(オチは秘密日記いん～w)

...なんか最近、昼寝の夢見が変...w (ーー#) w...★

「2匹のねずみ」 (高校?)

---

「2匹のねずみ」 (高校?)

2016年8月25日 リステラス星圏史略 (創作)

## 2匹のねずみ

「おやあれはなんだい。見たとこ電気もガソリンも使ってないようなのにコトコト動くね。」

「あれかい。あれは水車小屋だよ。小川の力で動くんだ。あんなもんがめずらしいのかね。」

そう答えておっほっほと田舎のねずみは笑った。

別に田舎のねずみは都会のねずみをバカにしたわけなんかじゃなく、ただ何でもよく解っている頭のよい、わけ知りの街ネズミにお知らない事というのはあるのだなァと思ったら、なんとなく心暖かく、楽しかったのだ

だけど都会のねずみは、そうはとらなかつた。



リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
X-Ω-X  
( 転生 管理委員会 )

<http://p.booklog.jp/book/109314>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109314>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109314>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ